

鹿児島県立与論高等学校 校長通信

第20号 (令和8年1月16日/校長 大倉秀心)



校訓「好学 創造 親和 不屈」

鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地1



電話 (0997) 97-2064

FAX (0997) 97-2844



灯台と東大

与論島に赴任して趣味のウォーキングを再開したことは以前触れました。五感を研ぎ澄ませば、体が日々の気温や湿度の変化を敏感に感じ取ります。歩きながらサトウキビ畑での収穫の様子を眺めれば、「ああ、今年も収穫の時期が来たね。収穫作業、ご苦労様です」と、農家の方々への敬意が湧いてきます。それと同時に、季節の移ろいを感じることで、「俺もまた一つ歳をとるな」と自分が老齢に近づいていることを自覚はしますが、「まだまだ老け込んでいる場合ではない」と自分を奮い立たせてウォーキングを楽しんでいるところです。心地よい環境で健康維持できることに感謝です。

最高地点が100mに満たない与論島ですが、琉球石灰岩が隆起してできた島だけあり、歩いてみると意外と道はうねうねとしてアップダウンが激しく、平らな道をウォーキングするよりも脚にかかる負担が大きいことを感じます。でもこれが私のような者には適度な体への刺激となりウォーキングを満足いくものにしてくれています。

基本的に平日は夕方歩くことになります。冬場になりますと、私が歩く時間帯は、ところどころ街灯があるとはいえ、ほとんどの道が真っ暗です。懐中電灯で足下を照らしながら歩くのですが、暗いおかげで満天の星を鮮明に眺められるウォーキングもなかなか乙なものです。高層ビルなどがない与論島は、見上げれば360度視界を遮るものではなく、贅沢な星空観察も同時にできるのです。

冬の夕方のウォーキングで私が好きなことのもう一つが灯台です。暗くなり出すと、灯台に灯りがともります。歩いていくと、プリシリゾートあたりから明滅する灯りはっきりと見える。視線を海に移すと、遠く伊平屋島からマッチ棒に灯った火のような小さな灯りがぼんやりと浮かんでは消えるのが見える。海を航行する船の安全を健気に一生懸命守ってくれている灯台たちにエールを送りたい気持ちになってきます。



そんなことを考えながらウォーキングをしていて思い出すことがあるのです。東大です。灯台と東大。ダジャレではありません。

そうではなくて、2005年度東京大学の二次試験、英語の長文読解問題にイギリスのウェールズ地方の灯台を舞台にした物語が出されたのです。以後、何度もこの題材を使って英語の授業をしたことを懐かしく思い出すわけです。

大人になるということ

この物語の内容を説明します。

主人公は13歳の陽気で快活な好奇心旺盛なイタリア人の少年です。彼は休暇でウェールズに来ていて、舞台となる灯台に初めて訪れる。好奇心旺盛な彼はらせん階段を上り最上階のドアをノックする。

ヒゲを蓄えパイプをくゆらせながら中から出てきたのは灯台守（とうだいもり=灯台の番人）の老人です。子どもらしい好奇心を隠すことなく灯台の中に足を踏み入れてきた少年に対し、この老人は実際に灯台のランプを点灯させながら灯台の仕組みについて説明する。その説明一つ一つに対して少年は驚きと喜びの感情を爆発させる。この少年の様子に老人は満足そうに、「今度は暗くなつてから是非おいで」と少年を誘う。

老人の誘い通り、少年は夜に再び灯台を訪れる。灯台の灯りに照らされた海と、灯りが消えたときの暗闇のコントラストが少年の心中に深く刻まれる。

一度、イタリアに帰った少年はクリスマスに、老人にフルーツケーキ（地元の名産品？）を送る。この時は老人に再び会うとは思ってもみなかつたが、翌年、今度は戦争からの疎開の形で再びウェールズに戻る機会を得る。

ウェールズに着くとすぐ少年は灯台を訪れるが、老人が灯台守を引退したことを知る。しかし、灯台守は辞めたが、天気がいい日の午後には灯台のそばに設置されているベンチに座っているという話を聞き、その時間に訪れて老人と再会を果たす。

ところが、老人は少年を認識することができない。「イタリアから来た少年で、とてもいい子だった子

のことは覚えている。クリスマスにはフルーツケーキを送ってくれたりして」という老人に対して、「それが僕なんですよ」といくら少年が言い張っても老人は、昨年訪れた少年と今日の前にいる少年が同一人物であることが認識できない。

「本当にあの子はいい子だった」と繰り返す老人のいい思い出を壊さないように、「だからそれがこの僕なんですよ」とこれ以上言うことを少年はやめる。そして、自分が様々な経験を重ねて大人になるにつれて、子どもだけが持つ初々しさ、純粋無垢さみたいなものを失ってしまう、そういう人生のステージに今自分がいて、老人の目には昨年の自分とは全く違って映っていることを悟る。

ザックリ言うとこういう内容です。大人になってしまえば、子ども時代のように天真爛漫にあらゆるものを感じて楽しむことができません。大人になってからはあの感覚を取り戻すことは二度とできないのです。灯台の灯りに照らされた海と、灯りが消えたときの暗闇のコントラストのごとく、はっきりとした境界線がそこにはある。

だからこそ、子ども時代に何のわだかまりもなく素直に経験し感じた感情はいつまでもキラキラと輝いているのかもしれません。皆さんも今、まさにこの少年がおかれている人生のステージに立っていると言えるでしょう。特に3年生は卒業・島だちを控え、二度と戻れない高校生活に郷愁を覚える人も少なくないと思います。でも、だからこそまだ高校生でいる間にできること、高校生でいる間にしかできないことに全力でぶつかり、そのしなやかな感受性でしっかりと記憶を刻んでほしいのです。

「卒業」と "Graduation"

「卒業」という言葉から皆さんがあなたが連想するものはどんなものでしょうか。当然、「小学校・中学校・高校・大学などでの学びを修了して、その場を旅立つこと」というのが一般的な感覚だと思います。何となく日本語の「卒業」には、物事の終了・終わりという感覚が強いイメージが私にはあります。皆さんはいかがですか。

では、「卒業」を意味する英語の "graduation" はどうでしょうか。「卒業」 = "graduation" と単純に暗記していませんか。

語源のつながりをたどっていくとイメージしやすいかもしれません。"graduation" は「階段・

段階」などを表すラテン語の "gradus" が語源とされています。英語で言うと "grade" ですね。見ての通り表記もううりふたつでわかりやすい。

英語の "grade" には意味がたくさんあります。「(価値・質などの) 等級・品質」「(軍・組織などの) 階級・身分」「(生徒の) 成績・評価」「(小・中・高校の) 学年」「(病気の進行・症状の) 段階・程度」などが主な意味です。最近では日本語でも「～はグレードが高い」みたいな感じでそのまま使われたりしていますね。ですので英語の "graduation" は、「グレードを一段階上げる時」と解釈すると理解しやすいかもしれません。同じ語源を持つ副詞の "gradually" が、「徐々に、次第に」という意味になるのもうなずけます。「グレードを一段一段上げる様、階段を一段一段上がる様」だと考えると納得がいく。

ですので英語の "graduation" は、ただ学習の終了を意味するのではなく、一つ上の段階・ランクに上がらなければならない。一度上がれば二度と下がることはできない、そういう瞬間だということです。これも「灯台の少年」がおかれていた人生のステージと一致しているわけです。

グレードを上げたからには

以前勤めていた学校の卒業生が長期休暇などで帰省したときに、わざわざ学校まで遊びに来てくれる方がよくあります。大学等（あるいは職場）での近況を語ってくれることは、教え子が卒業後はつらつと頑張っていることが伺え、教師にとってはとても嬉しいことです。

でも、なかには聞いていて少々モヤッと感じてしまうことがあるのです。それは次のような発言を聞くときです。

「やっぱり高校時代が一番楽しかった。もう一度高校時代に戻りたい」

高校時代がとても楽しかったことを言っているだけなので、気にせずスルーすればいいのかもしれません。でも逆に言うと、

「そんなに今の生活が面白くないのですか？」

という気持ちにもなるのです。やはり、グレードを一段上げたのであれば、そのグレードで自分を一番輝かせ、人生を充実させるような生き方をしてほしいと願わざにはいられないのです。